

隨筆に現れたる井上円了の思想

河村孝照

一、はじめに

筆者は先に、表記のテーマのもとに、円了の隨筆中、『甫水論集』、『円了講話集』、『円了漫録』、『人生是れ戰場』、『哲窓茶話』の五著について口頭発表し、それが報告書として印哲研究室よりタイプ印刷として出されている。今回はそれに『自家格言集』を加えて報告したいと思う。

知られるように、隨筆集にはそれぞれ性格がある。『甫水論集』は明治三十五年四月に出版され、つぎに『円了漫録』が明治三十六年の十二月に出され、そのつぎに『円了講和集』が明治三十七年の三月に出され、それから『人生是れ戰場』が大正三年三月に出され、『哲窓茶話』は大正五年の五月に出されている。

右五著の中で、『甫水論集』は館友中尾祖応が編集したもので、従ってこれには中尾の撰択眼を経て編集されたものであることがわかる。中尾祖応については今の所、その伝を詳かにしていない。然し本著には、円了と編

者の序文がある。円了の序の一節には、

館友中尾祖応君、余の論文を蒐めて一冊子となさんと欲し、是非共余の許諾を得んことを需められたり。然るに其論文中には、二十年前の旧稿も加わり居れば、今日より之を觀るに兎戯寐語に近きものありて、今更、之を世間に公にするは余り好ましきことにあらざれども、亦故らに己れの拙を掩ひ醜を隠さんとするは却て大人らしき業にあらざれば、且らく其請に任せて編輯することを許容せり。

と述べられている。この序によつても本書が論集すなわち論文集であることがわかる。

編者の序には、

身自ら進んで哲学を研究し、学校を興して青年を教育し、東洋哲学の研究を唱道し、仏教に新研究の道を開き、我国宗教の改革を主張せしものは博士井上円了氏にあらざや。

世間氏を称するに哲学の開山を以てする、豈怪むに足らんや。氏が我東京大学に入りて哲学の研究に従ふや、其得る所之を筆に上し、之を文に草し、以て東西両洋の哲学を鼓吹し、今の「哲学会」、是れ氏が明治十七年に興せしもの、今の「哲学書院」、是れ氏が明治二十年に設けしもの、今の『哲学雑誌』、是氏等が明治二十年に発行せしもの、今の「哲学館」、是れ氏が明治二十年に立てしもの、今の「政教社」、是れ氏が明治二十一年に興せしもの、今の雑誌『日本人』、是れ氏が明治二十一年に発行せしもの、今の雑誌『東洋哲学』、是れ氏が明治二十七年に発行せしもの、

其外氏が斯学の為めに尽せしもの牧拳に暇あらず。我国に於ける哲学研究の今日の如く隆盛に至りしもの、彼の仏教徒に多くの新思想を注入せしもの、東洋学の研究をして今日の如く隆かんならしめしもの、実に博士の力なりといふはざるべからず。（中略）博士の如きは実に我国の教育及び宗教の為に忘るゝべからざるの人

にあらずや。博士が著述せしもの、其数甚だ多しといへども、博士の著述以外に多くの論文は世に公にせられぬ。其教実に千篇に垂んとするといふ。然も年を重ねるに随ひて人の記憶を去り、卒に氓滅せんとす。惜しみても猶余りあるにあらずや。予其氓滅せんことを悲み、集めて冊子とせんことを博士に計りしに博士は快く之を諾せられぬ。依つて先づ数十文を集め、『甫水論集』と題し、書舖博文館にはかりて之を世に公にす。と右のように述べている。

この編者の序によつてもわかるように、円了はすでに明治三十五年までには教育者としてまた宗教者として社会的な評価を得ており、そうした円了の論文三十五編を集めて刊行したものであった。

つぎの『円了漫録』は、これは当初は遺言状のつもりで書かれたものであつて、本書の初めには遺言状が載つてゐる。そしてその後に、

左の漫録は平素眼に触れ、心に浮びたる種々雑多の事柄を筆に任せて蒐録したるものなり。故に之を題して円了漫録と云ふ。其書たる固より世道人心に何等の裨補する所なかるべきも、余が自伝の一小話なれば、之を刻して知人に示す。

と述べて、漫録百話を載せている。これは思ひつくまゝに記された隨筆である訳である。

そのつぎに公にされたのが『円了講話集』である。本書にも編者がある。秋山悟庵である。円了は本書に序して

秋山悟庵君ハ謹直ノ人ナリ。我門ニ出入スルヤ年已ニ久シ。平素余ノ談片小篇ノ新聞雜誌等ニ出ヅル毎ニ、一々之ヲ筆記シテ保存シ、其稿積テ一大冊トナル。近頃之ヲ印刷ニ付セントテ余ニ序文ヲ乞フ。余乃チ左ノ一詩ヲ題ス。

というのである。

編者秋山悟庵は「例言」と題して本書を公けにする由来を記している。すなわち、

余の博士の門に遊ぶこと已に久しい。本集は其久しきに亘りて博士が全国各所の請聘に応じて講演せられたるものや、或は各種の新聞雑誌の上で談論せられたものを、不才無能の余が閑にまかせて手録したのが積んで一大冊を成すに及んだ中の数十篇を撰びて博士の認諾を得、書肆鴻盟社に謀り、茲に蒐録刊行して同志に頒つことに至つたのである。

右によつて本書が編者の撰者眼によつて成れることがわかる。そしてさらに編者は、

本集其内容編次の順序に就ては、文学、宗教、倫理、教育、及び雑部の数篇に分類しやうと思ひしも、實際は不可能事に属した。其は他でない、或は哲学と宗教、或は宗教と教育、將た倫理と宗教等が相混じてゐるからである。故に到底的確な分類をなすことは不可能事だ。

右のように述懐している。そして編者は、

本集は甬水論集に次で世に公刊する予定であつた。されど、博士帰朝以来欧米周遊の土産として各所の講延に演述せられた最近のも併せ収め、そして読者に対して嶄新なる資料を供しやうと計つたので遂に遅延するの余義なきに及んだのである。

といつてゐる。これによつて本書は、編者を異にしているが『甬水論集』の姉妹篇であることがわかるのである。

『甬水論集』が三五項目、本文三九五ページ、『円了講話集』が四十項目、本文三五九ページ、附録十五ページ、形の上からも両書は姉妹にふさわしいものであつた。

つぎの『人生是れ戦場』は、円了が緒言において、本書は大正年間の国民、就中青年の当に尽くすべき天職に就き、予の卑身を發表せるものなり。

といい、大正年間における国民、とくに若い者、青年のまきに尽くすべき天職について意見を述べたものであるというのである。続いて円了は、

而して其内容は予が曾て再三世界各国を歴訪し、再四日本全国を巡視し、実地觀察したる結果を土台として、之れを一々戊申詔書の御聖旨に照処して講述したるものなり。

と述べており、このことによつて本書は戊申詔書の聖旨に照らして講述されたものであることがわかる。また円了は

今や西洋文明の舞台が漸く大東に向て移動しつつあるに際し、日本帝国をして其中心に立たしむるには、現代の青年が自発自動的に飽くまで努力奮闘し、断へず勇進活躍せざるべからず。本書は浅薄ながら各方面より世界の大勢を看破し、失敬ながら興奮の一喝を青年諸士に呈したるものなり。

と述べている。

このように本書執筆の動機は明瞭である。知られるように戊申詔書は、日露戦争の後、人心が次第に浮華に流れたのを憂い、明治天皇の名をもつて上下一致や勤儉を説き、国民教化にあてようとして発せられた勅諭であった。それ故円了は、「予の句の『天下無寧日』人生是戦場」に基き、『人生是れ戦場』と命名するに至れり、即ち平和の戦争に対する青年奮闘訓の意なり」（緒言）というのであった。

円了は本書を十段において述べている。それは、

第一段 序説

この中には自らを「百姓的学者」と称し、また「御詔勅の聖旨」など十三節にわたる。

第二段 人文

この中に再び「戊申詔書の聖旨」を述べ、世界の人文地誌に及んで十三節を設ける。

第三段 平和

この中で「世界各国の分業」とその「利害関係」を説き、その他十二節にわたる。

第四段 国運

ここでは「海外の発展」の様子を述べ、「国力養成の方法」を論じ、その他併せて十三節を設けている。

第五段 協同

ここではまず「上下一心」をあげて詔書の聖旨を発揚しようとしており、以下十二節をあげている。

第六段 勤儉

これは軽佻浮華を警しめ「勤儉治産」をを説き十三節をあげている。

第七段 信義

ここで「実業の発展」を取りあげ、信義の重んずべきことを主張し、十二節を設けている。

第八段 自彊

人口に膾炙した「東照宮の遺訓」をとりあげ、よく忍耐すべきことを説き、十三節を設けている。

第九段 一誠

よく「至誠の道」を説き、「迷信と正信」、「我宗教の革新」を説き、縦横に筆を揮う、十三節を設けている。

第十段 結言

最後の段に「奮闘的格言」、「奮闘的文章」をものして人生是れ戦場の結言とし、懦夫をして振り興さしめている。これに十三節を設けている。円了はさらに教育勅語の大意と戊申詔書の大意を述べてしめくくりとしている。

右が「人生是れ戦場」と題する円了の随筆であるが、本書は随筆とはいえ、すでに戊申詔書を鏡とした修身書であつて、そこには聖旨にこたえる円了の無私の心情の吐露するところである訳である。円了が緒言の末尾に、今日は全国各府県を通じ、各町村各部落に青年会あり、或は報徳会、或は斯民会、或は自彊会等あれば、若し其会員にして予の浅学を見捨てず、誠に一顧一読を割愛せらるるあらば実に望外の至幸とする所なりと述べる所をもつても、円了が望む所の読者が奈辺に存したかわかるのである。

二、『自家格言集』について

今ここできとりあげた『自家格言集』は、円了自ら「一名 明治菜根譚」と称するものである。菜根譚は知られるように明末の儒者洪応明の著わしたもので、儒教にもとずき、老莊、禪を交えた処世哲学書である。円了は菜根譚現代版という意味からこの『自家格言集』に名けたものであろう。

本書は「自序」によれば、

古人先輩の格言訓語の、往々厭世悲嘆の声を含み、或は消極隱退の風を帯び、今日の時勢に適應せざるもの多し。故に余は生意気ながら之を改作修正せんと欲し、尔来人より訓誡の語句を需めらるゝ毎に、自ら案出せるものを書いて与ふることとなせり。此頃不幸にして慈母を失ひ、喪中和田山哲学堂内に蟄居し、徒然の余り自

家の格言集を編成せんとの望を起し、数年間の手帖を探り、其中に折に触れ機に応じ、古語を改作せるもの、或は自ら案出せるものを書き置たれば、一々之を拾ひ集め、部類を分ち、仮りに人生、修養、教育、宗教、哲学、実業、国家、妖怪、雜類の九門を設け、計らずも一小冊子をなすに至る。其中には真面目なるもあり、滑稽なるもあり、高尚なるもあり、平凡なるもあり、漢詩の寢言もあり、和歌の腰折もあり、俳句のゴマカシ、否十七文字のお化もあり、玉石同架、味噌糞同槽の觀あるも、汽車旅行中に千態万状の風光の車窓に映し来るが如く、却て読者をして倦まざらしむるの便ありと思ひ、取捨選択を行はず、其の俚印刷に付することゝなす余の詩歌は自ら言文一致流俗調派と公称し、其雅号を或は不知歌齋詩拙道人とも名くる程なれば、法に外れ格に合はざるものゝみにて、殺風景を極むるも、是れ亦読者が汽車旅行中にトンネルの暗処に逢過せる心地にて看過せられんことを望む。本書は最初親類知友に亡母法要の饅頭を配布する代用の心得にて、贈呈だけの予定なりしが、友人の勸告により、更に余分の印刷を命じ、広く世間の所望に應ずることゝなす。茲に本書印刷の次第を記し、以て自序に代るなり。

明治四十二年九月

と述べられている。これによつて本書は、

一、素材の取捨選択が行なわれていない。

二、部類を分けたのは著者円了自身であること。

三、数年間のためおきであり、一時の思いつきでないこと。

四、もともと親類知友に配るつもりのものであつて、広く世間に出す目的のものでなかつたこと。
右の事情から、本書は円了の考えがかなり素直に表われているもの、とみて差支えないと思う。

本書の成った明治四十二年九月といえ、八月二十七日に母堂いく刀自の永眠にあい、円了はすでに哲学館大
学長、京北中学校長（両校とも明治三十九年一月）を辞し、つづく明治四十年には京北幼稚園長をも辞職し、
地方の巡講に寧日なき日をおくられている時であつた。

三、『自家格言集』における円了の思想

1、人生篇

『自家格言集』における円了の第一分類は「人生」であつた。その人生にもられた格言はどのようなものであ
ろうか。今原著の句にナンバーを付してその中からとくに思想の顯著にあらわれたものを示してみよう。

- 1、人生は戦場、又人生無_二寧日_一。
- 4、樂而迎_レ老、笑而迎_レ死。
- 6、生きて居る間にうんと働きて、死んでゆつくり休め世の人。
- 8、門松は出世の旅の一里塚
- 14、人必要_レ有_二十六丁_一、手与_レ口共是八丁、即十六丁也。
- 16、髮白眼逾青、身老心益壯。
- 18、勇進如_レ虎、活動似_レ龍、日夜奮闘、意氣益揚。
- 20、世海波難_レ静、人生是戦場、勤_レ君須_二奮闘_一、任重路逾長。
- 29、退招_レ損、進受_レ益。

30、離者必会、衰者亦盛。

32、欠くれば満つる世の習ひ。

34、苦にするな、あらしの後に日和あり。

37、許_二輩酒入_二我門_一、禁_二悲觀入_二我家_一。

41、人壽則多_レ榮。

45、さいはいは笑ふ御方の門にすむ、あくまで笑へ頬のおつるまで。

47、蝸牛角上競_二長短_一、蝶夢場中争_二是非_一、畢竟人生須_二力戰_一、待君一奏_二凱歌_一帰。

55、年々歳々花相似、歳々年々人不_レ同、花無_二向上_一發展力_一、人有_二日就月將功_一。

56、我善養_二吾向上_一之氣_一。

58、優勝劣敗本天理、弱肉強食是世態。

72、梅花墜_レ地実已成、黄河入_レ海水漸清、無心萬物猶如_レ此、都追_二向上_一一路_一行。

74、祇苑精舍鐘声、有_二青年立志之響_一、沙羅双樹花色、顯_二大器晚成之理_一。

右のように円了人生に関する七四句の中、二一句をあげてみた。

右の句はいずれも人生樂觀論であり、人生は進歩向上一路の試験場であるという認識が極めて強い。そうして円了は、当時流行した進化論を背景にもち、優勝劣敗、弱肉強食は社会の摂理であるから、人生は決してそれに負けてはならないという警句が多い。しかしこれは円了が世の人々のために説くものであって、円了自らはまた、48、知_二向上_一而不_レ知_二向下_一者逆上也。知_二向下_一而不_レ知_二向上_一者下血也。共非_二健全之人_一也。

右においては、向上することのみをもって己れの人生とする者は逆上のほせであり、また人を導こうとすること

のみをもつて己れの人生とする者は下血貧血症であり、いづれも健全な人とはいえない、向上と向下と相まつてこそ健全なる人であるといい、勇往邁進、奮闘努力のみの活き方の眞のすがたをさし示している。また、

50、独立而不_レ孤立、自重而不_レ自尊。是吾所_レ執之主義也。
といっている。独立必ずしも独歩ならず、ともに上下一致して国運の発展に期する、また軽々しく動じない、さりとて自ら尊しとするものではない。中庸を得て対処対応する、これが自分の主義であるというのである。これはまた次の句にも明瞭に示されている。それは、
60、正偏兼到、動靜随_レ時、処世之要、益存_二干斯_一。
すなわち正偏かね到り、動靜時に随う、これ処世の要といい、ここに円了の人生に対する中庸観を見ることができ

きる。
円了自らが選んだ人生の句に、時に開き直りの人生観がある。先にあげた
34、苦にするな、あらしの後に日和あり。

これはかの哲学館事件に遭遇した時の述懐であつた。また円了は、
73、来者相迎去不_レ追。守_レ誠只与_二此心_一期。人生褒貶輕如_レ屁。声大臭高皆一時。

これは「人生の褒貶」と詠まれているが、全体の調子はむしろ貶に対する開き直りと見られる。

また円了には時勢に対する辛辣な批判もある。すなわち、

66、善人為_二惡人_一私_二租税_一。

69、官吏啜_二農夫之汗_一、富人吞_二貧民之淚_一。

70、虚榮懸_レ衆情錘、私利所_レ存萬客従、浮薄如_レ斯君莫_レ怪、世間多是_二拝金宗_一。

右のごときであり、当時の時勢を彷彿とさせるものがある。

2、修養篇（道徳を含む）

第二は修養の部門である。円了はこれにカッコを付して「道徳」としている。つまりこれは円了の道徳観でもある訳である。先と同じく句にナンバーを付して顕著な例をあげてみよう。本篇に五三句がかかげられている。

2、以_二堪忍繩_一縛_二怒鬼_一。

3、以_二辛抱棒_一打_二情鬼_一。

4、堪忍袋中藏_二万福_一。

5、堪忍の袋の中に萬福の、ひそむと知りて堪忍をせよ。

6、堪忍水鎮_二瞋恚火_一、温和風開_二歡樂花_一。

27、怒者短時之狂也、忍者終生之藥也。

右の句は堪忍、辛棒の徳を養うことをすすめたものであることがわかる。また円了は、

11、忠舟孝棹達_二道源_一。

12、仁雨義風洗_二情地_一。忠日孝月照_二心天_一。

13、冠_レ仁而立、履_レ義而行、懷_二忠孝_一而坐臥。

16、仁如_レ糖、義如_レ塩、糖塩相待而調理成。仁義相待而平和成。

53、今日人心如_二乱麻_一、只憂国軀失_二精華_一、若君欲_レト安身地_一、仁義街頭忠孝家。

右の句は、忠、孝、仁、義の徳のすぐれたることを説いていることがわかる。五倫と五常を兼ねて忠孝仁義の徳にまとめていることは、日本国家、また天下の大道に重点をおいていることが理解できる。その一例として、

54、北辺昔年戰雲横、東洋今日風浪平、我輩幸遇「此隆運」、喜見皇威压「滿清」、国恩深大何以報、三百余言聖訓明、恭儉持「己博愛」衆、義勇奉「公能尽」誠、儒仏所「説亦相似」、忠孝為「重身命輕」、君若欲「行」修養道、「挙々服膺護」心城」。

右のような国際情勢の中にあつて日本人の修むべき道としての道德が示されている訳で、聖訓三百余言とは外ならぬ教育勅話をいつたものである。

当然のこととして、円了はつぎの教育講学のところにおいて忠孝を説く。

3、我一呼吸、莫「不」忠孝氣」。

6、身住忠天孝地間。

7、忠食孝衣渡「生涯」。

8、織出経忠緯孝文。

9、吾家風物人知否、忠山孝水別乾坤。

10、忠孝の道は鳥にも知られけり、雀は忠々鴉は孝々。

11、孝行をする年頃に親はなし、親ある内に孝行をせよ。

55、月照忠臣跡、花開孝子家、古来済「其美」、今日見「精華」。

58、克忠克孝一心伝、億兆築成皇礎堅、千古清風吹不「断」、文明壇上国華鮮。

またつづく第四宗教のところにおいて、

39、大道由来孝与「忠」、仏門所「説亦相同」、真宗遺訓君知否、王法為「先是祖風」。
と述べており、また第七国家の篇においても、

1、君民一家、是我国体也。忠孝一元、是我皇道也。

3、忠礎孝柱国家安。

10、皇国無_二以為_レ宝、惟忠以為_レ宝。

11、我邦之為_レ道也、忠孝一体、故尽_レ忠則孝在_二其中。

12、忠_二于金錢_一者支那人也、忠_二于職業_一者米国人也、忠_二于君国_一者日本人也。

22、忠孝の鎧をつけて戦はば、露にも仏にもどいつにも勝。

などの句をあげている。右の中第十の皇国観は見逃すところである。

ま円了が拾遺の中に二十七句をあげているが、その中にも、

27、雀すら忠々啼くは我人に教を告ぐる心なるらん。

28、忠孝に心をよせて居る人は、鼠の音をも忠々と聞く。

などといい、忠孝の徳を記すことほとんど全篇にみなぎるといつてよい。

つづく仁義についても、第四宗教の篇において

7、儒之仁如_レ水、耶之愛如_レ火、仏之慈如_レ月。

といい、儒教の仁、キリスト教の愛、仏教の慈悲を、それぞれ、水、火、月にたとえて三教の比較を論じている。

また第八妖怪及迷信の篇において、

18、仁義為_レ礎、忠孝為_レ柱、則家相莫_レ吉_レ焉。身守_二勤儉_一、心守_二誠実_一、人相莫_レ善_レ焉。

と述べて、仁義、忠孝をもって家相人相にまで及んでいることを知るのである。そしてまた、

32、仁者不_レ信_二妖怪_一、智者不_レ惑_二妖怪_一、勇者不_レ懼_二妖怪_一。

これは智仁勇の徳と妖怪との関係を示したもので、妖怪字を講じた円了ならではの格言であることがわかる。また拾遺篇に

29、我邦の五常は仁義礼ならで、忠礼勇素信の五ヶ条。

というのがある。仁義礼智信は中国の道徳の五常であつて、わが国では忠礼勇素信であるというのである。ここに孝の字を見ないのは、当時の道徳にあつては忠孝一本と認識せられており、円了が国家篇に、

1、君民一家、是我国体也。忠孝一元、是我皇道也。

と述べているのがそれであるとみてよい。

この円了のいうわが国の五常は、明らかに明治十五年に陸海軍軍人に与えられた軍人勅諭の五ヶ条と相対応せしめて考察してよいと思う。その勅諭の中の五ヶ条は、

一、軍人は忠。節を尽すを本分とすべし。

一、軍人は礼。儀を正しくすべし。

一、軍人は武勇。を尚ぶべし。

一、軍人は信。義を重んずべし。

一、軍人は質素。を旨とすべし。

右の五ヶ条の徳目は、円了のいうわが国の五常と全く対応する。

右のように、円了は忠孝仁義を道徳の大本としてることがわかり、それに関する格言は一部をあげただけでも右のようである。

円了は修養の道として心の問題を格言の上にとりあげている。すなわち

- 1、一心清則萬事清、一身安則萬境安。
- 7、心誠則不_レ禱而神自護。
- 8、心誠則百鬼不_レ追而去、千福不_レ招而來。
- 9、心底樹_レ德身上發華。又、心底養_二道根_一身上發_二德華_一。
- 21、秋みんと遠き山路を登るより、心にやどる月をながめよ。
- 22、暗き夜も雨のふる日も照する、我真心の光り仰げよ。
- 23、山賊非_レ無_レ虞、心魔尤可_レ恐。
- 25、身行善事心自樂、心抱_二惡念_一身亦苦。
- 26、心是小天地、良智良能、是小日月。
- 31、一家和則四時皆春、一心明則三界悉道。
- 34、心為_二形役_一、是馱馬耳、身被_二名索_一、是籠鳥耳。
- 36、心地上塵緣自息、性天中真月独朗。
- 37、夜深人定後、静坐見_二天真_一、妄念雲何去、心頭月一輪。
- 38、百念如_レ烟萬事輕、升沈不_レ敢与_二世爭_一、夜深心海風波穩、理性高辺自有_レ声。
- 39、先天の声は心の底に鳴る、聞く度毎に身をば慎め。
- 40、妄念の雲にかくれて真心の、色は見えねど声はきこゆる。
- 42、禍福無_レ門惟人所_レ招、苦樂無_レ根惟心所_レ生。
- 43、朝夕に心の紙に修身の、文字をゑがきて読めや人々。

44、文字知らぬ身にも心の徳あれば、暗夜も晝の心地こそすれ。

45、情雲常鎖畫猶昏、真性何時能實現、幸有^二修身教會燈、靈光一線照^三心面^一。

47、情眠人不覺、歲月夢中過、君独揮^三心劍、一呼降^三百魔^一。

52、人生前路茫茫々、世海晦冥何敢傷、日夜心珠磨不^レ息、放來真善美中光。

右のごとく円了は心を修養の根幹にしていることがわかるのであるが、就中、円了の心理論は明瞭であり、例
えば、

1、一心清則萬事清。

26、心是小天地。

31、一心明則三界悉道。

42、苦樂無^レ根、惟心所^レ生。

右の如きは唯心論に立っていることは判然たるものであり、円了は他において唯物論を破するところがあるから極めて当然の理である訳である。また、

36、心地上塵縁自息、性天中真月独朗。

38、夜深心海風波穩、理性高辺自有^レ声。

40、妄念の雲にかくれて真心の、色は見えねど声はきこゆる。

45、情雲常鎖畫猶昏、真性何時能實現、幸有^二修身教會燈、靈光一線照^三心面^一。

52、人生前路茫茫々、世海晦冥何敢傷、日夜心珠磨不^レ息、放來真善美中光。

右のごとき格言においては、円了は真如縁起説にもとづいて格言をものしているとみられるのである。

修養道において円了は酒色を強く警めている。すなわち、

32、酒色之涖浩々易_レ沈、向上之峰巍々難_レ登。

33、世の人の溺れ易くて危きは、酒より色の涖にこそあれ。

49、酒色易_レ傷身、貪瞋亦苦神、一誠能自守、百福不_レ招臻。

50、拔山倒海力、猶難_レ護心城、請看歷山帝、酒魔奪_レ其生。

右のごとき格言は酒色を警しめたものであることがわかる。第五十の歴山帝とはマケドニアのアレクサンダー大王のことであり、彼が酒にて自滅したことをとりあげたものである。

このほか修養の道として恭儉を説き貪瞋の毒をあげる。例せば貪瞋を警しめるごときは、
27、怒者短時之狂也。忍者終生之業也。

48、貪瞋無_レ不_レ賊、油断亦吾仇、自省若相怠、此心何日休。

51、鎮_レ得貪瞋火、奏_レ来克己功、身心和氣満、随处起_レ春風。

右のようにあげることができ、貪瞋の心を抑えることが修養であることを示すのである。貪瞋は仏教でいえば三毒に入る強い煩惱であり円了はこれを、

2、以_レ堪忍繩_二縛_一怒鬼。

6、堪忍水鎮_二瞋_一悲火、温和風開_二觀_一樂花。

右のように「いかり」を鎮めるのに堪忍、辛棒の徳を説くのである。堪忍辛棒の修養については円了はまた、

3、以_二辛_一抱棒_二打_一惰鬼。

4、堪忍袋中蔵_二万福_一。

5、堪忍の袋の中に萬福の、ひそむと知りて堪忍をせよ。
右のように説いている。

3、教育篇（學術を含む）

円了は諸徳の根幹に忠孝仁義をもつて格言していることを先にも触れたが、教育にあつてもその基礎となるものの中に忠孝をとりあげて教育の格言として見るのである。例えばこの篇中五十八格言の中にあつて、

3、我一呼一吸、莫不忠孝氣。

6、身住忠天孝地間。

7、忠食孝衣渡生涯。

8、織出經忠緯孝文。

9、吾家風物人知否、忠山孝水別乾坤。

10、忠孝の道は鳥にも知られけり、雀は忠々鴉は孝々。

11、孝行をする年頃に親はなし、親ある内に孝行をせよ。

54、月照忠臣跡、花開孝子家、古來濟其美、今日見精華。

57、克忠克孝一心伝、億兆築成基礎堅、千古清風吹不斷、文明壇上国華鮮。

右の格言をあげることができるのである。仁義については

17、冠仁履、又、食仁衣義。

右の格言をあげているのである。

13、陋巷一生培徳樹、清風千古見精華。

また円了は

2、人生至樂在三育英^一。

5、開智以為^レ務、育英以為^レ樂。

と述べているが、これは格言といわんよりは円了の実感であろう。

円了の教育の徳目としたところは広くかつ多い。例えばいま忠孝仁義を除いた諸目をうかがうに、

4、春花秋月、朝雨暮風、無^レ非教也。

5、開智以為^レ務、育英以為^レ樂。

12、勉強する年頃に時はなし、時ある内勉強をせよ

15、耕^レ道漁^レ徳、又、耕^ニ文田^ニ漁^ニ武海^一。

16、経文緯武。

36、修^ニ活学^ニ必要^ニ活書^一、読^ニ活書^ニ必要^ニ活眼^一。

38、天地山河是我居、何須窓下惜^ニ三余^一、欲^下興^ニ活学^ニ除^中時弊^上、二十年来不^レ読^レ書。

48、多才与^ニ多芸^ニ易^レ敗^レ事、無才与^ニ無芸^ニ却^レ立^レ身。

49、多芸多才を頼にするな、無芸無才が身を立つる。

50、紳士欲^下敏^ニ於行^一、而不^下訥^ニ於言^一。

などをあげている。右において活学活書は円了のもつとも強調するところであり、実学を重んじ応用の学をひろく教授したが、これには純正哲学の裏付があつたのである。またとくに教育勅語に言及し、

18、肇^レ国宏遠神武帝、樹^レ徳深厚鳥見山。

55、三百有余言、祖宗遺訓温、此身何幸甚、日夜浴_二皇恩_一。

56、三百余言聖旨深、祖宗遺訓重_二於金_一、読来天壤無窮句、一道光明照_二我心_一。

右のように述べている。円了が勅語に拳拳服膺するすがたが眼前に彷彿するところのものである。

また教育に関する酒脱の句もあり、

21、智者楽_レ酒、仁者楽_レ餅。

22、智者好_レ茶、仁者好_レ餅、勇者好_レ酒。

24、牛董頭上林果墜、達賓胸底家禽栖。

25、牛董の頭におちし林檎かな。

40、鳩保々而啼、児欣々而遊。

などをあげることができる。牛董とはワシントンのことであろう。また達賓とはダーウインのことであろう。

円了の教育上の格言はこのように多方面にわたるが、また総論的な句をあげれば、

23、読_レ書神遊_二千古上_一、凝_レ恩心転_二萬境外_一。

26、人生而不_レ学、如_二暗夜無_レ燈而行_一。

27、無_レ学而渡_レ世、如_二盲者觀_二演劇_一。

28、知識之源泉必經_二教育_一而流。

29、少時貪_レ暖、則老後寒矣。

30、チクタクと時計の鳴るは皆人に、勉強せよと催促の声。

31、読めや学べや世はやみならず、無智の建てたる倉はない。

33、光陰貴_ニ於黃金_一、黃金失_レ之、猶可_ニ再得_一、光陰一去、則不_ニ復得_一。

34、今（イマ）という今の今なの時はなし、マの時来ればイの時は去る。

35、健心宿_ニ於健身_一、健智住_ニ健腦_一。

37、遺伝者元金也、経験利_ニ殖之_一、教育保_ニ管之_一。

41、家庭生_ニ育之_一、学校長_ニ養之_一、社会熟_ニ成之_一。

などその外にもあるが、いまこれらより気付くことは時間を大切にすること、今一つは当時進化論の盛んなるより、遺伝を教育の場にもち来れることである。

円了の教育上の特色をあげればいくつかあるが、

32、女子でも心の徳を研きなば、男まさりになれる世の中。

これはついに大正五年、始めて女子の入学を許可するという事実となって現われた。

また痛烈な社会批判もある。例えば、

43、権兵衛が種まけば鴉がほじくる、教師が種まけば社会がほじくる、三度に一度は逐はずばなるまい。

これは哲学館事件のことをいったものであろうか。何れにせよ教育の自由を主張したものである。また、

51、宗教家守_ニ墓門_一、教育家守_ニ校門_一。守_ニ墓門_一者為_ニ老爺老婆所_レ婦。守_ニ校門_一者為_ニ幼童幼女所_レ敬。其他顧

而笑_レ之、是我邦之奇觀也。

52、坊主根性者円也。役人根性者角也。円角相半者教育根性也。

53、面皮堅_ニ鉄_一、人情薄_ニ似_レ紗_一、聖言及_ニ時弊_一、就_レ実去_ニ浮華_一。

右は社会批判であり、円了の新仏教運動なども軌を一にする思想である。

4、宗教篇

円了は宗教篇に五十四の格言を輯めている。宗教、哲学は円了のもっとも専門とする分野である訳である。これは宗教を、

1、宗教源泉自_二心底最深之处_一湧出来。

2、宗教者開_二宇宙秘藏_一之宝鑰也。

3、絶対関内之真景、非_二宗教_一則不能_レ窺也。

54、宇宙由来万象新、誰言無_レ法又無_レ人、若君欲_レ接_二真如境_一、須_レ与_二風花雪月_一親_上

右は宗教論ともいうべく、また宇宙由来の格言は仏教論ともいうべきものである。また哲学と宗教との關係を、
4、世間如_二原野_一、哲学如_二山岳_一、宗教如_二河水_一。発_二源於哲学之山岳_一、而流入_二世間之原野_一者是宗教也。
右の格言をもつて表わしている。

また諸宗教、例えば神儒仏の三道、キリスト教などの比較論において、

6、神道如_レ梅、儒道如_レ菊、仏教如_レ蓮、耶蘇教如_二薔薇_一。

7、儒之仁如_レ水、耶之愛如_レ火、仏之慈_レ月。

8、神道直也、仏教円也、耶蘇教平也。

9、天保亡而文久残、儒道廢而仏教存。

10、儒屋欲_レ傾一柱支、仏燈欲_レ滅一光統。

右のように諸宗教の特徴をあげてたくみに比較論を諒解し易く格言としている。

右の中で仏教についてこれをいえば、

33、三界は唯一心と聞くからに、心一つで仏とはなる。

34、さ夜ふけて心の波のしづまれば、真如の月の影ぞさやけき。

38、今宵てる月や仏の影ならん、天上天下唯我独尊。

43、無始劫来流転身、生々死々奈沈淪、一声遙向大悲喚、凡地応開彼岸春。

44、西天遺教及東陲、正像時過末法時、彌勒未生我將老、奈斯三毒貧瞋痴。

46、また今日も家内安全無病無事、こは御仏の恵みなりけり。

53、掃去心中煩惱埃、生何足喜死何哀、凡夫与仏本同躰、無悟無迷無去来。

右の格言において仏教の何たるかを説示しているといえる。しかし仏教に対する痛烈な批判を円了は、

16、誦經文而不解經文者、教田之蛙也。唱法華而不知法華者、僧林之鶯也。

17、真宗無識（門徒不知物）禪宗無錢、浄土無情、法華無骨、是今日之四箇格言也。

19、朝傾般若湯、夕眠大黒傍、昔時清浄境、今化酒色場。

20、七万寺院十万僧、皆言末世伝法燈、若除葬式仏事去、八家九宗有何能。

右のごとき格言をもつて警句となしているのである。

また浄土については、

32、望遠鏡中窺浄土、電燈影裏拜如来。

40、両方有仏大悲新、永劫修成超世因、我者一心念斯仏、忽為極樂界中人。

45、鳴く鳥も岸うつ波も松風も、我をたのめの弥陀の呼声。

などの格言があり、また禪については、

21、達祖遠來時不佳、徒然而壁送生涯、如今若使斯翁在、一喝応驚三万井蛙。
51、禅意吾難解、曾聞色即空、熟眠無念処、大悟在其中。

52、達祖西來伝法音、不宗経蔵只宗心、我聞如是為君語、禅海深於哲海深。
右のごとき等の格言をもつと禅の意を表している。しかし円了にあつては

39、大道由來孝与忠、仏門所説亦相同、真宗遺訓君知否、王法為先是祖風。

このように仏法と世法との關係を説き示し、かつ自らを、

22、染衣説法復何能、蓄髮吾曾学大乘、四十余年如一日、自称非俗又非僧。

右のように「非僧非俗」と称していることを知るのである。また円了は靈魂について

13、人之靈也、火不能燒之、水不能腐之。

14、天鑒如眠而不瞑、人魂如死而不滅

また哲学篇において、

11、身死而不死者神靈是也。

と述べているが如き、明瞭に靈魂の不滅を説いたものであることを知るのである。

5、哲学篇

宗教と共に哲学も円了の最も得意とする分野の一である。この哲学篇には四十七の格言がおさめられている。
3、人類孕理想、理想産哲学。

7、高出字上遠遊宙外者、只有理想耳。

9、無翼而飛、無足而走者、文明之利器也。坐而窺天、默而使神者、哲学之理想也。

これは人が理想を追い求めるところに哲学が存することを示している。また、

23、古聖今賢道不_レ二、東儒西哲徳相同。

31、哲学海連西与_レ東、津涯何処望難_レ窮、諸家立論多_二偏執_一、真理由来在_レ守_レ中。

32、東洋哲学之大観、如_二登_レ高而望_レ遠_一。西洋哲学之小景、如_二出_レ室而歩_レ庭_一。

これは東西哲学を比較して述べられたものである。また、

42、孔釈瑣韓世所_レ推、靡然遺教遍_二華夷_一、述而不_レ作承_二三代_一、唯我独尊凌_二六師_一、千古卓論驚_二詭弁_一、一篇批
判掃_二懷疑_一、西賢東哲皆同轍、真道何辺有_二兩岐_一。

これは四聖賢を讃じたものである。

つぎに西洋哲学については、

33、経験之手、織_二成英国哲学_一、独断之口、吐_二出独逸哲学_一。

37、韓圖一講認識_二而論壇自有_二衆化尽処松千尺之観_一、達實一唱_二進化_一而学界亦有_二群鳥喧時一声之状_一。

38、哲学と聞けば鍛冶屋を思ひ出す、ヘーゲルの哲学こそはくさからう。

右の鍛冶屋は、カントカントと鳴ることをいい、ヘーゲルは屁をいっただけのものであらう。

先にあげた四聖の各哲人に対しては、

43、釈尊懷_二大志_一、決意出_二王居_一開_二眼尼連岸_一、転_二輪鹿苑墟_一、有空中道鏡、大小両乗車滅後三千載、護持猶未_レ
除。

44、孔子生_二周末_一、人心漸晦冥、詩書尋_二古道_一、仁義立_二常經_一、四百州帰_レ徳、三千徒満_レ庭、学燈長不_レ滅、万
古作_二明星_一。

45、西賢推三瑣哲一、学海別開レ源、詭辯皆緘レ口、彝倫始固レ根、対妻能忍レ怒、臨刑好吞レ冤、後進繼三遺志一、高風百世存。

46、近欧多三哲士一、韓氏実空前、看三破懷疑妄一、証三明独断偏一、論壇開三認識一、理海見三先天一、身老心猶壯、研磨八十年。

右は順次に、釈迦、孔子、ソクラテス、カントと各聖賢の特徴を出して示したものである。

これによつて円了の哲学は東西の哲学を兼ね摂めており、中でも東洋にあつては釈迦と孔子、西洋にあつてはソクラテスとカントを哲学の聖者として尊崇していること、すでに世に周知せられたところであることがわかる。

6、実業篇

実業に関する格言は、六十六を数え、その職種も、農業、商業、漁業、林業、養蚕、牧畜等多種多様にわたつている。またその実業にあたつての心構えにおいても、忍耐、誠実、勤儉等の徳目を説示している。今は主としてその徳目についての円了の警言をあげるならば、

9、勝利竟歸三于能忍之人一。

12、辛抱の棒で怠惰の鬼を打て。

32、勉強与三忍耐一、能変三寸陰一為三尺金一。

37、公德為レ礎、忍耐為レ桂、是一家万全之道也。

65、忍耐遂開レ愚化賢、勉強能変レ海為レ田、人間万事皆如此、勿レ謂窮通只在レ天。

右は忍耐勤勉の徳をあげたものである。また、

13、一誠貫三百事一、一忍排三百難一。

51、千羊之皮不_レ如_二一孤腋_一、百計之術不_レ如_二一誠実_一。

このように誠実が実業を貫く根幹であることを説き、

48、商売は仏の業と心得て、自利と利他との行ひを積み。

49、信用の陰徳つめば何人も、陽報ありて御店繁昌。

50、正直の外に手段はなかりけり、如何に工夫を凝らしてみても。

などと信用、正直、利他の精神を説いているのである。

円了は勤儉をすすめ、

6、勤儉門内自有_二楽園_一。

7、窮鬼不_レ窺_二勤儉門_一。

18、不_レ勞而食是盜_レ食者也。

24、貧乏は稼ぐ足には追ひつかぬ、いそぎであるけ福の宿まで。

27、貧乏の鞭に打たれて稼ぎ出す、人は牛馬と何んぞ扱はん。

31、身貴而愈恭、家富而愈儉、事成而愈慎、名揚而愈戒。

38、治_レ家以_二勤儉_一為_レ先、待_レ人以_二誠実_一為_レ本。

39、有_レ勤無_レ儉、恰如_レ容_二水於無底之槽_一

などの格言を示している。その他円了は具体的に実業職業をあげること多く、

1、農為_二国礎_一、商為_二国柱_一。

3、桑婦戴_レ星、農夫帶_レ月婦。

40、蚕兒胎中藏「富源」。

41、国家富源人知否、藏在「蚕兒寸身中」。

42、山林亦国宝。

などを見るのである。これらによつて円了は国家経綸の抱負をもつておられることがわかるのである。これはまた、

66、戦後経営百事繁、要「開皇国富強源」、奉「来尊徳先生訓」、殖産興農皆報恩。
と述べるところによつてさらに明瞭に示されているのである。

7、国家、家庭篇

円了の国家論はきわめて明らかである。それは本篇格言四十六を数えるその第一に、
1、君民一家是我国体也。忠孝一元是我皇道也。

と説示されているところによつて知ることができる。また、

11、我邦之為「道也」、忠孝一体。故尽「忠則孝在其中」。
と格言するのも同じ趣意である。

このわが国体の大本は、

5、古来我国体之大鼎、依「神儒仏三教之足」而立矣。

といつており、神儒仏の三道をもつて国体の鼎とすべきことを説いている。

わが国をもつて諸外国に比するとき、

12、忠「于金錢」者支那人也、忠「于職業」者米国人也、忠「于君国」者日本人也。

13、西洋人不_レ尽_二孝於親_一而尽_二於妻_一。

16、富国強兵是欧米、富国弱兵是支那、貧国弱兵是朝鮮、貧国強兵是日本。
などの特徴をあげているのである。

わが国の家風は、

15、紳士無_レ仁、商人無_レ信、僧家無_レ徳、是我邦之通弊也。

37、日本人とかけて何と解く、書翰の文章ととく、其意は早老（候）が多い。

38、日本人の氣風とかけて何と解く、貧乏人の嫁入ととく、其意は長持がない。
などの警句が多いことがわかる。中でも、

31、鎌が世に出れば中啓が引込、サーベルが世に出ればブックが引込む。
右の如きものはその最たるものといえる。

8、妖怪、迷信篇

円了の妖怪学は余りにも有名である。円了の妖怪観はこの篇、四十五格言の中において明快に説かれている。例
えば

1、人心者妖怪之府也。

2、百妖千怪起_二於人心_一。

3、塵々皆是妖、念々無_レ不_レ怪。

6、迷前有_二千妄_一、悟後只一真。

7、迷則自家亦鬼窟、悟則随处皆淨土。

8、心こそ心まどはす心なれ、狐狸も天狗も心から出る。

9、化物の正体みれば我心。

10、幽霊本来無_レ形影_一、妄念為_レ縁現_二此相_一。

11、幽霊本何物、畢竟是空華、欲_レ檢_二其真体_一、請觀枯尾花。

右の如きは妖怪はまさに一心中に存するものであることがわかる。これより迷信も、

15、心有_レ迷則髮影足響、亦為_二妖怪_一。

16、世之迷信人之所造也。家庭産_レ之、社会育_レ之。

17、三百六十日、日々皆吉日。四方上下隅、方々皆吉方。

18、仁義為_レ礎、忠孝為_レ桂、則家相莫_レ吉_レ焉。身守_二勤儉_一、心守_二誠実_一、人相莫_レ善_レ焉。

このように迷信も人の造る所であり、人これを知れば日々是れ好日であるというのである。しかし宇宙森羅万象には真怪ありといい、

40、老孤幽霊非_二怪物_一、清風明月是真怪。

41、吾曾為_レ衆作_二童謡_一、一誦千迷忽霧消、天狗幽霊非_二怪物_一、清風明月是真怪。

42、活眼を開きて觀れば天も地も、水も空氣もすべて真怪。

右のごとき格言をあげているのである。

四、まとめ

以上のように、

1 人生

2 修養、道徳

3 教育、学術

4 宗教

5 哲学

6 実業

7 国家、家庭

8 妖怪、迷信

の八項目のもとにおいて、円了の格言の特徴あるものをあげて、大方円了思想の一斑をうかがった訳である。この分類自体が円了が示したもので、その分類下に各格言を配したのも円了であつてみれば、円了の真意の一端をほぼ知りうるものと思う。さらに雑類の中において、

○我すきは豆腐あげもの味噌の汁、とはいへなんでも人のくふもの。(筆者註、食べ物)

○我すかぬものは間食ばかりなり、お茶の外には間飲もせぬ。

○朝はいや昼は少々晩たつぷり、とはいふものゝ上戸ではなし。(筆者註、酒)

などは円了の嗜好を知ることのできるものである。

また雑類中の、

○肺病や胃癌などにてザリ／＼と、死にゆくよりもゴツトリがよい。

○我死なば湯灌をせずに娑婆の垢、つけたまゝにて火あぶりにせよ。

○ひとりゆく死出の旅路と会葬や、香典などはお断りせよ。

○葬式や墓場にかける金あらば、半銭たりとも人に施せ。

○次の世もまた人間に生れたし、仏になるの見込なければ。

これは円了の死生観を知る上で大変貴重である。円了のこれらの格言も、その一部は、次の項目、すなわち格言集最後の篇「拾遺」において変つてくるところがあつた。例えば、

○火炙りもよけれど却て手がかかる、土葬の方が手輕とてよい。

○若し後に墓場が狭くなつたなら、骨だけ取りて其時に焼け。

これは「雑類」における火葬よりの改変である。また自己の法名をこの「拾遺」において、

○法名は甫水院釈円了と、定めて墓にほりつけて置け。

と遺言の形で記しているのである。

「拾遺」における最初の句と最後の句はきわめて印象的であつた。最初の句は、

○独力経営二十春、春看校運幾回新、自今退隠成何事、朝汲泉流夕拾薪。

独力経営二十の春、喜び看る校運の幾たびか新なるを、今より退隠何事をか成す、朝に泉流を汲み夕に薪を拾はん。

右の句は円了自ら「哲学館退隠当時の作」といつている。そして「拾遺」最後の句は、
○我建てし哲学堂は世の中へ、差上げてくれ死んだ後には。
といつているのである。

五、おわりに

以上円了の随筆集、とくに今回は円了自編の『自家格言集』によって円了の思想を顕わにすることを試みた訳であるが、これは円了自作の格言により円了自らの語るところに謙虚に耳を傾けるという方法によって、円了の思想を知ろうとしたこと右のごときであつた。

(終)